

平城宮第一次大極殿院 西面回廊の調査

—第561次

1 はじめに

本調査は第一次大極殿院回廊の整備事業に先立つ事前調査で、整備をおこなう国土交通省からの受託調査である。本調査区は、平城宮跡資料館がある平城宮の西側から第一次大極殿前に通じる園路が敷設された場所であったため、発掘調査がおよんでいなかった。第一次大極殿院回廊は、平城遷都1300年事業に際し、奈良県によって修景柵による仮整備が施されていたが、これを一部先行撤去して調査をおこなった。

2015年12月14日から重機掘削を開始し、翌年2月2日に発掘調査を終了、2月16日に埋戻しまで完了した。調査面積は225㎡。

2 基本層序

調査区は、南側を第192次、北側を第436次調査区に挟まれた場所にあたる。調査区西壁の土層図(図189)からわかるように、第192次調査の後、第一次大極殿の整備に際し、約1m厚の整備盛土が施され、第436次調査後にも遷都1300年祭時の仮整備にともなう整備土が厚く盛られていた。調査区中央には整備盛土内に奈文研施設へとつながるケーブルが収められた管が埋設されており、これを撤去することができないため、東西方向の畦を残して調査をおこなった。

現代の整備土が1.7mほどあり、その下に旧表土、耕土・床土が20~30cm程度残る。旧表土中のとくに旧園路にあたる部分は硬化剤が染み込んで、黒灰色を呈する部分が広がっていた。遺構検出面は68.5m付近。

3 検出遺構

本調査は整備に必要な遺構面の高さを確認することが主目的であり、回廊の構造や遺構変遷などについては、既調査で十分なデータを得ていると判断し、平面検出のみにとどめた。ただし、後述の東西溝SD19956については、時期を確認するため、掘り下げをおこなった。

堀SA13404 第一次大極殿院 I-3 期の一本柱堀 SA13404の柱穴 2 基を検出した。掘方は一辺約1.5mの



図188 第561次調査区位置図 1 : 5000

隅丸方形で、柱間は約4.5m。

礫敷SH6603C 調査区東寄りでは、まばらだが5~10cm程度の礫が集中する部分があり、第一次大極殿院内庭部の礫敷とみられる。第192次調査の検出面の高さから、I-4期のSH6603Cにあたると思われる。

東西溝SD19956 東西畦のすぐ南で検出した東西溝。西半は畦の下にもぐるが、東壁で調査区の東に続くことを確認した。幅50~70cmの素掘溝で、深さ約30cm。検出面や埋土の遺物から奈良時代の溝とみられる。調査区北半分はⅡ期の南面築地回廊がかかると想定され、この溝が南雨落溝である可能性を後述する。

4 出土遺物

調査区からは整理用コンテナ19箱分の瓦が出土した。瓦はいずれも包含層からの出土で、軒瓦は7点と少なく、6134Ab、6281Aなど型式にまとまりがない。土器は整理用コンテナ1箱分程度である。東西溝SD19956から奈良時代の須恵器、土師器が一定量出土したが、遺存状態が悪く、詳細な年代の特定は困難である。

5 まとめ

ここで東西溝SD19956とⅡ期南面築地回廊の南雨落溝との関係について、考察を加えておく。

これまで南門の東側でおこなった発掘調査では、南雨

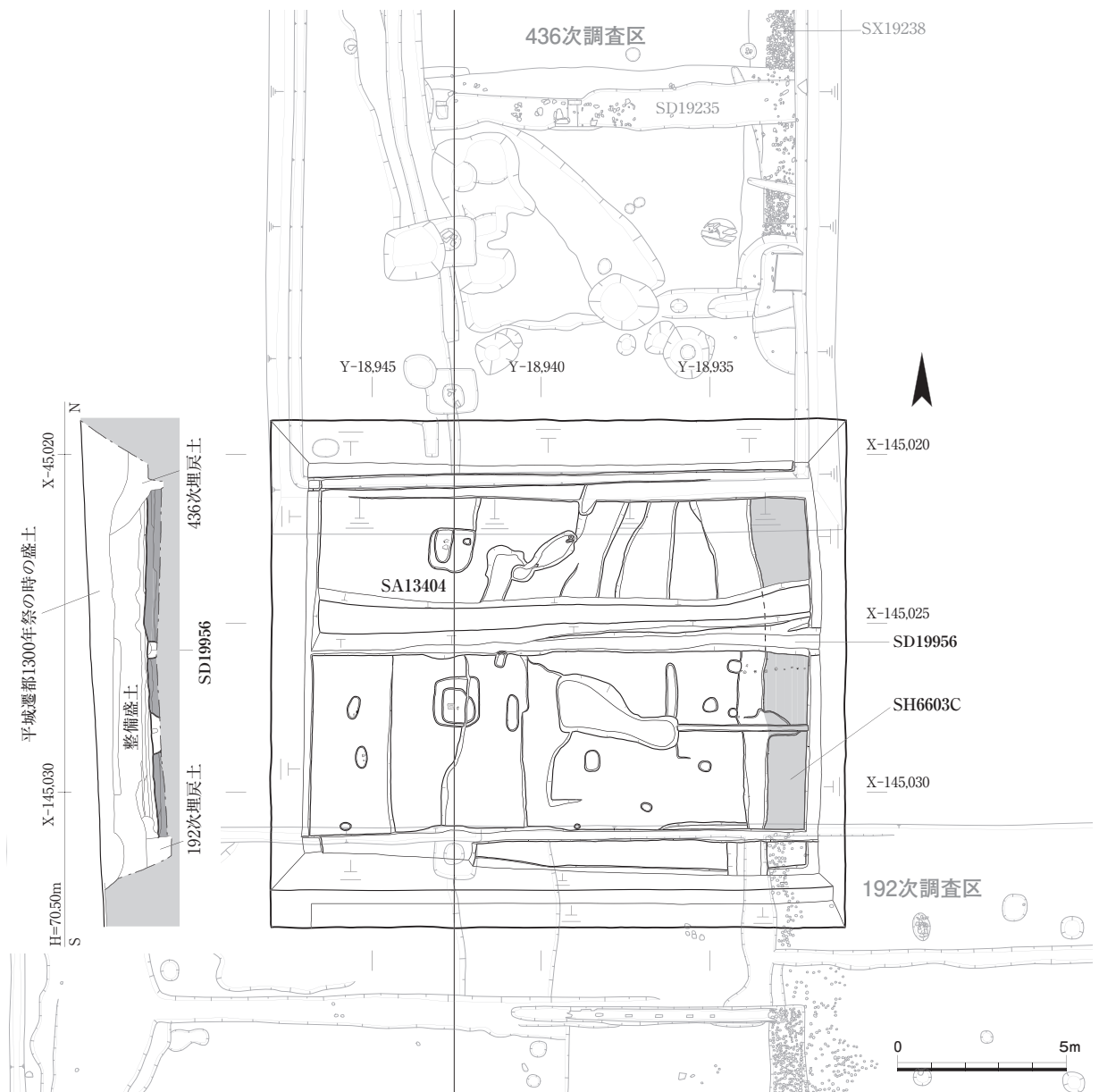


図189 平城第561次調査遺構図・土層図 1 : 200

落溝は検出していないが、北雨落溝SD3778を検出している。第436次調査で検出したSD19235は、この北雨落溝SD3778にそろうことから、西面回廊を横切る暗渠とされる。当調査区でみつかった溝SD19956との心心間距離は約16.3m (55尺) となる。

Ⅱ期築地回廊の幅は、西面築地回廊から推定されている(『平城報告 XⅦ』)。西面築地回廊では東雨落溝を検出しており、これを築地心で折り返すと、雨落溝心心間は約12.5m (45尺) と推定できる。したがって、溝SD19956を南雨落溝と考える場合は、西面回廊の調査データから推定した側溝心心間よりも約3m (10尺) 程度大きいことになる。

南面回廊の幅が西面に比べて、大きいと考えるか、築地の内外で、築地心と雨落溝の距離が異なるとみるのか、慎重な議論が必要であろう。

また、この溝SD19956を南雨落溝とみない場合は、北雨落溝より約12.5m (45尺) の推定位置に東西方向の溝が検出されていない点が疑問として残る。削平されたと考えるには、その3m南で、奈良時代の溝SD19956が残存していることからみて、その可能性は低いと言わざるをえない。いずれにせよ、Ⅱ期築地回廊の幅については、今後の検討課題として残る結果となった。

(神野 恵・林 正憲)